

研究主題

「自己効力感を高める授業モデルの開発」

八王子市立由井第一小学校

教諭 北島 大輝

第1 主題設定の理由

本研究主題を設定する理由は2点ある。特別支援教室に関する「入室の問題」と「退室の問題」という2つの問題があると思われるからである。

第1の「入室の問題」とは、すなわち、今日において特別な支援を必要とする児童が増加しているという問題である。例えば、文部科学省が令和4年度に実施した通常の学級における特別な教育的支援を必要とする児童に関する調査¹において、学習面又は行動面で著しい困難さを示す児童生徒数の割合が小学校・中学校においては推定値8.8%とされ、平成24年に行われた調査において同推定値が6.5%であったところから、2.3%の増加が見られている。また、東京都の調査²においても、特別支援教室の制度開始時(平成28年度)の利用児童数9,442人から、令和5年度の利用児童数は24,829人となっており、2.5倍以上の増加が見られている。確かに、そういった困難さを示す児童は、学校への不適応、学習への無力感、意欲関心が低いといった傾向が強いと日々の指導の中でも感じている。

第2の「退室の問題」とは、すなわち、退室を想定し、特別支援教室での学びを在籍学級等でも児童が活かせるように、効果的な指導方法や在籍学級等との連携方法についての議論が充分になされていないという問題である³。特別支援教室の目的は、在籍学級等で可能な限り多くの時間、有意義な学校生活を送れるように、特別支援教室での指導・支援を通して、児童が抱えている学習や生活上の困難さや課題を改善・克服していくことである。しかし、東京都が令和3年度に作成した「特別支援教室の運営ガイドライン」⁴において、「原則の指導期間」という考え方が示され、原則1年間の指導を基本とし、退室目標に対してどうだったかを振り返りながら指導を行っていくこととされた。つまり、児童が可能な限り多くの時間を有意義に在籍学級等で過ごせるように、原則の指導期間に基づいて、特別支援教室の指導・支援から、在籍学級担任を中心とした指導・支援に切り替えていくことが今後さらに求められているのである⁵。

こうした理由のもと、本研究は、各児童が抱える課題や困難等の解決に向けて、子ども視点での授業改善をすることと、一般化に向けて、特別支援教室における指導者の指導力の向上や在籍学級等との連携方法の探究を目的としている。

第2 研究仮説

特別支援教室において、「やってみたらできた」「うまくできた」といった成功体験を積み、自己効力感を高めれば、通常学級など他の場面で、意欲的に取り組むことができる場面が増えるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 先行研究論文の分析

自己効力感 (self-efficacy) と特別支援に関する先行研究では、奈良理紗 (2021)⁶、小木曾誉ほか (2016)⁷、吉利宗久 (2014)⁸ などをはじめ、指導者の自己効力感を研究の対象とするものが多い。他に、集団での SST (ソーシャルスキルトレーニング) を通して、対人的な自己効力感を高めることができるとする研究に、高橋史ほか (2014)⁹、本田真大ほか (2009)¹⁰、植村里香ほか (2009)¹¹ などがある。指導に関するものは、野崎善之ほか (2023)¹²、宮嶋友香理 (2018)¹³、田村妙子 (2009)¹⁴ などが挙げられる。

野崎善之ほか (2023) では、特別支援学校高等部で実施される現場実習前後の生徒の自己効力感がどのように変化するのか検証し、効果的な現場実習のあり方について考察している。GSES (一般性セルフ・エフィカシー)¹⁵ テスト、質問紙と自己理解ワークシート (自作) を使用し、量的、質的に活用している。質問紙等の検証から、実習において、実習現場に生徒の特性を伝える 本人ができそうな作業を繰り返し行うことで成功体験を積む (制御体験) スタッフがそばで付き添う丁寧な説明やアドバイス、励ましの声掛けを行う 生徒が成果を実感できるようにできたことを記録し、自覚できるような形で伝える (言語的説得) といったことを行うことで、自己効力感を高めることができた と考察している。

宮嶋友香理 (2018) は、漢字の習得に困難を示し、プランニングの弱さが見られる児童に対して、プランニングが促進する認知特性に応じた指導を行い、ビデオによる言語分析などを通して、自己効力感が促進したとしている。

田村妙子 (2009) は、発達障害をもつ児童の「自己効力感」を高めるために、教科指導以外の場、掃除の指導に重点を置き、スモールステップでの指導の結果、自己効力感が徐々に上昇していることを述べている。掃除場面からその他の場面 (教科学習) などへ自己効力感がどのように影響したのかは推測に留めている。自己効力感の尺度には、GSES を用いて、指導の各段階で事前事後に調査をしている。

以上の先行研究を踏まえ、本研究の視点を 自己効力感を高めるための心理学理論の活用 自立活動におけるピラミッド (焦点化) モデルの提案 「生成 AI (ChatGPT)」¹⁶ (以下、生成 AI) を用いた授業づくりの 3 つに設定した。

2 開発研究

(1) アルバート・バンデューラの自己効力感と 4 つの情報源

アルバート・バンデューラの「自己効力感」と関連諸概念

アルバート・バンデューラ (Albert Bandura, 1925-2021) (以下、バンデューラ) は、著書『激動社会における自己効力』¹⁷ において、自己効力感について「予想される状況を管理するのに必要な行動を計画したり、実行したりするための能力に関係する」と述べている。また、バンデューラは繰り返し「自己効力感」は「信念」であることを述べている。以上のことから、端的に言えば、バンデューラの言う「自己効力感」とは、自分の能力に対して、「それができる」と予測する、そういった自分の信念のことであると言える¹⁸。加えて、バンデューラは「効力予期」(efficacy expectations) と「結果予期」(outcome expectations) という概念を用いて「自己効力感」について説明している¹⁹。前者の「効力予期」をバンデューラは「自己効力感」と呼び、自分の能力に対する予測・行動の決定をしていく要因として重要視している²⁰。後者の「結果予期」とは、「ある行為が

ある結果をもたらすだろう」という行動の結果に対する見通しのことを言う²¹。具体例を挙げれば、「勉強をすればテストで100点が取れる」というのは、「結果予期」であり、「テストに向けて、うまく勉強できるだろうか」とするのが「効力予期」である。

「自己効力感」と関連した概念に「自己肯定感」、「自尊感情」(self-esteem)、「自己有用感」といったものがある。「自己肯定感」は、「自分がいて他者がいて、その中で自己の存在を肯定できる感覚」²²のことを言う。そして、「自尊感情」は、自己概念を構成する主要な要素の一つで、自分自身の価値と能力に対する感情あるいは評価のことである²³。最後に、「自己有用感」は、「他人の役に立った、他人に喜んでもらえたなど、自分と他者(集団や社会)との関係を自他ともに肯定的に受け入れられることで生まれる自己に対する肯定的な評価」²⁴のことを言う。

それぞれの概念で重なる部分もあり、明確に区別することは難しいと考えるが、「自己効力感」は、自分の能力に対する信念であるのに対して、「自己肯定感」、「自尊感情」、「自己有用感」といった概念は、自分自身の感情や感覚のことを言い、他者との関係の中で生じるものであることに重点が置かれている²⁵。

「自己効力感」を高める4つの情報源

「自己効力感」を高めるために、どのようにすれば良いのだろうか。バンデューラは自己効力感を育む源として4つの情報源(sources of information)を示している²⁶。

1点目は、「制御体験」(enactive mastery experience)である。換言すれば、「成功する体験」のことである。バンデューラによれば、自分で何かをなし遂げた体験は、「自己効力感」を作り出す最も強力な方法だとする。また、「制御体験」には忍耐強さが必要であり、簡単すぎても難しすぎても「自己効力感」を低下させてしまうと述べている。そのため、児童への指導の際は、どのような課題を設定していくのが重要になってくると考える。

2点目は、「代理体験」(vicarious experience)である。社会的モデルによって与えられる体験のことである。バンデューラは「代理体験」について、「自分と同じような人々が忍耐強く努力をして成功するのを見ることは、それを観察している人々に、自分たちもそのようなことができるのだという信念をわきあがらせることになる」と説明している。他者の行っていることについて観察を通して学習すること、すなわち、モデリングを通して「自分にもそれができる」という信念を高めることができるということである。観察をする際は、「制御体験」と同様に、モデルとの類似性が大切である。このことはバンデューラが「自分自身とモデルとの類似性が高ければ高いほど、モデルの成功や失敗の影響を受けるようになる」と述べていることから分かる。

3点目は、「社会的説得」(verbal persuasion)である。バンデューラは「ある行動を習得する能力があると言われてその行動を勧められた人は、問題が生じたときに、自分の欠陥についてくよくよ考えたり、自分に疑念を抱いたりしないで、その行動により多くの努力を投入し続けるだろう」と述べている。つまり、相手に対して励ましたり褒めたりする声掛けは、その人の行動に大きな影響を与えるということである。

4点目は、「生理的・感情的状態」(physiological and affective states)である。バンデューラは「身体の状態を向上させ、ストレスやネガティブな感情傾向を減少させ、身体の状態を正しく把握することである」と述べている。体調を崩していたり、感情が落ち込むなどネガティブな状態になっていたりすれば、その人の「自己効力感」は低下してしまうということである。すなわち、

教育場面で言えば、児童の心身の状態をよく観察することが指導をする側にとって必要になってくるということである。

(2) ピラミッドモデルと心理学理論(4つの情報源)の学習指導要領における位置付け

本研究では、自立活動(個別指導)の授業を開発する上で、「ピラミッドモデル」を提案している。「ピラミッドモデル」とは、学習指導要領解説自立活動編で示されている指導内容の6区分27項目において、1つの区分を中心的に取り上げ、その区分内の項目に焦点化して指導内容を考えていくことである。

学習指導要領解説自立活動編において、個別の指導計画を作成する際の手順の一例が5段階で示されている²⁷。

個々の児童生徒の実態(障害の状態, 発達や経験の程度, 生育歴等)を的確に把握する。

実態把握に基づいて指導すべき課題を抽出し, 課題相互の関連を整理する。

個々の実態に即した指導目標を明確に設定する。

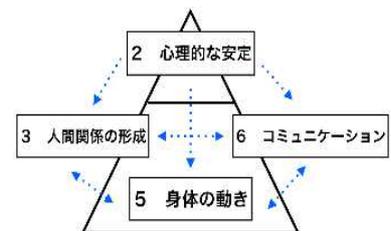
小学部・中学部学習指導要領第7章第2の内容の中から、**個々の指導目標を達成するために必要な項目を選定する。**

選定した項目を相互に関連付けて具体的な指導内容を設定する。

(太字、下線筆者)

この一例において、「ピラミッドモデル」は、の段階において、焦点化する区分やその区分内の項目を設定し、その他の選定項目と、階層を分けて相互に関連させることを言う。

本研究における授業モデルの開発では、「2 心理的な安定」、とりわけ「(3) 障害による学習上又は生活上の課題を改善・克服する意欲に関すること」に焦点化して単元を構成している(右図)。焦点化する区分は他の区分でも活用可能だと考えるが、本研究では、「2 心理的な安定」に焦点化することに加え、「自己効力感」を高めることで意欲を育むことを研究対象としている。なぜなら、バンデューラはある課題に対する「自己効力感」が変化すると、その他の課題に対する「自己効力感」も同様に変化していくことを述べているからである²⁸。それゆえ、自己効力感を高め、学習上や生活上の課題を改善・克服する意欲を育むことで、他の課題(例えば、他者との関わりの基礎となる部分や運動・動作の基本的な技能)に対しての改善・克服する意欲につながると考える。



(図1) 本研究におけるピラミッドモデル

では、バンデューラの「自己効力感」を高めるために示している4つの情報源をもとにして、具体的な指導場面でどのような指導方法や内容を取り上げることができるか検討する。

「制御体験」について、学習指導要領自立活動編では、第7章第3の2、(3)具体的な指導内容の設定(ア)において「ア 児童又は生徒が、興味をもって主体的に取り組み、成就感を味わうとともに自己を肯定的に捉えることができるような指導内容を取り上げること」²⁹と述べられている。情報源の4つ目「生理的・感情的状態」とも関連するが、興味をもって取り組めるよう教材や教具を用いながら、成功体験、学習指導要領に基づけば、成就感を積み上げていくことが重要である。

そのためにも、児童の実態を踏まえて、野崎(2023)³⁰の実践にあったように、スモールステップで本人ができそうな課題に繰り返し取り組むことで、直接的な成功体験を積むことが重要であると考え。本研究の授業では、対象児童の興味・関心がある飛行機(紙飛行機)をテーマに取り上げ、児童ができそうな課題や課題達成のための手立てを考え、授業を構想した。また、学習指導要領において、インクルーシブな教育の実現に向けて、各教科との連続性が述べられている点を踏まえ、自立活動(個別指導)での成功体験が在籍学級での学習に結び付くよう、自分の学習のめあてを設定する、ワークシートに書くといった在籍学級での課題にも取り組んだ。

「代理体験」については、一緒に折るなど紙飛行機の折り方を実演する、動画を見せるといった活動場面や、紙飛行機の名人から折り方や飛ばし方のコツについて動画を通して学ぶといった活動場面を設定した。学習指導要領において、「児童生徒にとって余りに課題が容易すぎても進歩は望めないし、難しすぎても意欲を喪失させてしまうことになるので、この点に留意することが大切である」³¹と取り組みやすい指導内容にすることが良いとされている。上述の通り、このことは制御体験や代理体験を考える上でバンデューラも同様のことを述べている。指導の中では、動画の分かりやすさや動画でどの部分を見せるかなどといったことに留意して選定したり、ヘラなどの道具を使い児童がモデルと同様のことができるようにしたりした。

「社会的説得」については、自分のめあてについて活動後に振り返ったり、活動途中の努力や進歩をその場でフィードバックしたりすることを行った。学習指導要領においても、児童が自分のめあてを自覚し、それに対して自己評価をしたり、指導者がわずかな進歩を称賛したりすることで自分の行動が成功に結び付いていくことが自覚的になることや自分を見つめ直すきっかけとなることが述べられている³²。また、児童に言葉掛けする際のフィードバック情報³³にも留意した。例えば、自分の学習のめあてを設定する際に、「マスタリー目標」を児童に意識させた。「マスタリー目標」とは、自身の進歩や向上をめざす目標のことを言う³⁴。児童がめあてを設定する時に、「前回の学習より、〇〇が〇〇までできるように〇〇する」といったように具体的に授業で取り組むことを明確にするようにした。このことで、自分がどこまでできたのか(またはできなかったのか)を自分で意識したり、指導者が励ましたり行いやすいようにした。さらに、活動後の振り返りでは、自分のめあてがどうだったか自己評価させることに加え、「現実を構成しているのは、具体物の存在論的な構造ではなく、人が経験をいかに意味づけるか」³⁵と、アルフレッド・シュッツ(Alfred Schutz, 1899-1959)が述べているように、めあてに対して児童がどのような努力ができたか(あるいはできなかったか)など具体的な場面を取り上げ、指導者が児童の行動をしっかりと意味付けることを意識した。

「生理的・感情的状態」では、その時の児童の実態を考慮しながら、指導を進めるようにした。指導前後の家庭や学校での出来事によって児童のようすが落ち着かなかったりイライラしたりするようすが見られる場合があるので、予定した指導の内容を簡略化したり指導の時間を短縮したりするなど配慮をした。指導の内容については、「それができる」「やってみよう」と児童に思わせるように、学習の環境を作ったり、声掛けを行ったりした。具体的には、上述の通り、興味・関心があり、活動に対して不安感の少ないと考えられる「飛行機」をテーマに指導を行った。また、絵を描いたり、工作をしたりすることにも関心があることから、紙飛行機を作る活動を授業の中に取り入れた。そして、教室を研究所、対象児童を研究生と見立て、教室掲示を考えたり、教材を考えたりした。さらに、毎時間の指導で、「こうなりたい」「こうしたい」という思いを、毎時間児童

に言語化させ、意欲につながるようにした³⁶。加えて、自己決定・自己選択する機会を多く設定した。特別支援学級学習指導要領（第7章第3の2の（3）のオ）において、「オ 個々の児童又は生徒に対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げること」³⁷とあるように、複数の課題から自分のめあてにあったものを選択させたり、その後の活動を「どうしたい？」などと児童に尋ねて自己決定させたりする機会を多く設定した。

（3）心理学理論と生成 AI の活用

単元計画や実際の指導を考える際に、生成 AI を補助的に活用した。令和5年7月に示された文部科学省の「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン」³⁸において、校務における活用例がいくつか挙げられており、その中で、教材のたたき台など児童への指導にかかわる業務支援での活用が例として示されている。個人情報やプライバシーに関する情報の保護を確実にすることや取得情報の真偽を確かめること（ファクトチェック）を徹底し、あくまで「たたき台」とし補助的に生成 AI を活用していくことが、現時点では良いと考える。

本研究では、心理学理論を単元計画や授業のプロセスの中に落とし込む際に、生成 AI を活用した。なぜなら、それぞれの心理学理論をその通りに授業で行っても効果的に用いることができるとは必ずしも言えないからである。このことは学習指導要領でも述べられている。

自立活動の指導に適用できると思われる方法又は方法の裏付けとなっている理論が幾つか想定される。それらには、例えば、心理療法、感覚訓練、動作の訓練、運動療法、理学療法、作業療法、言語治療等があるが、これらの理論・方法は、いずれも自立活動の指導という観点から成り立っているわけではない。これらについては、実際の臨床においてそれなりの効果があると評価されていても、それらはそれぞれの理論的な立場からの問題の把握及びその解決を追究しているものであることを忘れてはならない。したがって、その方法がどのように優れていたとしても、それをそのまま自立活動の指導に適用しようとする、当然無理を生じることをあらかじめ知っておくことが必要である。³⁹

つまり、心理学理論は理論としては優れていても、「そのまま自立活動の指導に援用しようすると、当然無理を生じること」がある場合が考えられる。自立活動の指導においても、活用できる理論は多くあると考えられるが、その理論を指導で用いる際は、児童の実態や指導のプロセスなどを考慮して適用していく必要があるということである。その点に学術的な理論を実践に活用する難しさがあると考え。それゆえ、理論と実践には乖離が起こってしまうことも少なくはない。その溝を埋めるのに役立つと考えるのが生成 AI である。生成 AI について、文部科学省が示したガイドラインでは、「あらかじめ膨大な量の情報から深層学習によって構築した大規模言語モデル（LLM（Large Language Models））に基づき、ある単語や文章の次に来る単語や文章を推測し、『統計的にそれらしい応答』を生成するものである。指示文（プロンプト）の工夫で、より確度の高い結果が得られる」⁴⁰とある。すなわち、「自己効力感」、「4つの情報源」などといった具体的な心理学理論の言葉を指示文に入力することで、求める結果に近いものを生成 AI が導き出してくれるのではないかと考える。この点において、心理学理論と生成 AI の相性は良いのではないかと考える。

3 授業研究

(1) 実践の概要

(ア) 単元目標

飛行機について探究することを通して、主体的に参加する態度やそのためのさまざまなスキルを身に付けることで、自己肯定感を高めたり、ものごとに取り組む自信を付けたりできる。

(イ) 単元計画⁴¹

第1次

繰り返し、紙飛行機を作成する。

《活動例》

- ・作り方を見ながら、さまざまな種類の紙飛行機を作成する。
- ・どうしたら真っ直ぐ飛ぶのか、遠くまで飛ぶのかなど試行錯誤をしながら紙飛行機づくりを一緒に行う。
- ・紙飛行機を飛ばしてみる。



第2次

自分で調べて、よりよく紙飛行機を飛ばす方法を探究する。

《活動例》

- ・図書室で本を読んだり、学習用端末を用いたりして、調べ学習を行う。
- ・フライトシミュレーターを体験する。
- ・パイロットや航空関係者の話を聞く。(動画、オンライン)



第3次

探究したことを、自分の言葉でまとめる。

《活動例》

- ・調べたことをもとに、飛行機模型を組み立てる。
- ・探究したことを、探究シートにまとめる。
- ・成果物を指導者や友だちに伝える。

(2) 検証授業(令和5年12月実施)

特別支援教室 自立活動(個別指導)において、単元名「飛行機博士になろう」で検証授業を実施した。

(ア) 本時の目標

- ・取り組む課題や課題解決の方法を自ら選択し、意欲的に取り組むことができる。
- ・学習のめあてや感想を自ら考え、記述することができる。

(イ) 本時の展開(第1次)

	学習活動・学習内容	指導の留意点【キーワード】	評価規準《評価方法》
授業前	飛行機がなぜ飛ぶのかなど、興味関心をもつ。	・興味のある本や模型などを用意しておく。【生理的・感情的状態】	
導入	あいさつをする。 本時の学習内容とめあての確認をする。	・ホワイトボードに学習の流れを示し、見通しをもたせ、学習に対する、不安点がないようにする。 【生理的・感情的状態】 ・前時の振り返りをもとに、自分のめあてを確認し、めあてをワークシートに書かせる。記入例を提示する。書けたことに対して、即時フィードバックをする。【代理体験】【制御体験】	
展開	飛行機研究をすすめる。 ・パイロットコース(紙飛行機の飛ばし方を工夫する。) ・エンジニアコース(紙飛行機づくりに取り組む。) ・学者コース(飛行機について本やインターネットで調べる。) の中から、選択して取り組む。	・終了時間を伝えておく。 ・基本的な約束を確認する。(人やものに向けて飛ばさない。特別支援教室の授業以外では飛ばさない。作成したものは、連絡帳などに入れて保管するなど。) ・選択肢をもとに、自分で取り組むことを決めさせる。 ・自分が計画していたことができた際は、児童が取り組んだことやその頑張りを褒めたり、ワークシートに花丸をしたりする。【社会的説得】	すすんで、課題に取り組むことができたか《観察》

<p>まとめ</p>	<p>振り返りを行う。 楽しかったこと、うまくいかなかったことなどを、ワークシートを用いて振り返りながら、今後の学習の見通しを一緒に確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「こうなりたい」「こうしたい」といった意欲をもたせるようにする。【生理的・感情的状態】【目標調整、時間・学習環境の調整】 ・ワークシートに本時の感想と次時の計画を書けるように、一緒に内容を考える。自分で書くことができた部分を褒める。【制御体験】【社会的説得】 	<p>取り組んだ学習について、自分の言葉で感想を述べ、次時の見通しを立てることができたか《観察》</p>
------------	---	---	--

(ウ) 授業の考察

第4時の授業において、児童に取り組むコースを自己選択・自己決定させたことは主体性や意欲を高めることにつながった。何もないところから活動を選択・決定させるより、はじめの段階においてはいくつかのコースの中から選択させる形にしたことで、児童が選びやすくなった。選択肢が増えたり、活動内容を理解したりするとその後の授業において、自分のめあてをもとにコースを組み合わせて取り組むようすも見られた。第6時の授業【補足資料(1)】において、モデリング学習として「折り紙名人」の折り方を見せたことで、折り方や飛ばし方のコツが分かり、その後の活動で目に見えた(遠くまで飛ばせた)成果につながり、自己効力感の高まりを児童自身が感じることができた。一方で、バンデュエラが、課題が難しすぎても容易すぎても良くないと述べるように、モデルとの距離には配慮が必要であった場面も見られた。同年代の子の折り方をモデルとして見せ、「自分にはできない」と自己効力感が下がるよりは名人の折り方(コツを学ぶ)としたことが結果的には良かった。しかし、他の指導場面(ワークシートの書き方)では、指導者が名前や内容を手書きで書いた記入例をモデルとして示した際に、「これ、先生が書いたの?」などとワークシートに記入することから興味・関心がずれてしまうことがあった。掲示物や板書などの環境調整はもとより、モデルの選定には配慮が必要であった。

第4 研究の成果

本研究の成果は2点ある。1点目は、児童の変容についてである。年度当初は、特別支援教室において、小集団指導では発言場面が少なかったり、他の児童や他の指導者との主体的な関わりも少なかったりしたが、2学期は自分からすすんで「〇〇を一緒にやろう」などと他者を誘いに行き、活動を楽しむようすが見られた。また学級においては、在籍学級担任と話をする中で、学級活動の授業において繰り返し自分の意見を発言するようすが見られたことや体育科等の授業の中で、仲間と一緒に取り組む姿が多くなったというようすを聞くことができた。他にも、音楽会へ向けた学習を経て、音楽や楽器への興味が高まったようすを本人や保護者との話の中で伺うことができた。対象児童の意欲が高まったようすはさまざまな場面で見られた⁴²。

2点目が、特別支援教室での自立活動(個別指導)において、自己効力感を高める授業モデルを提案できたという点である。東京都の小学校において、特別支援教室は平成30年に全校に設置さ

れ、ハード面の整備は進んでいる一方、特別支援教室の指導について経験のない指導者も多くいるのが現状である。そういった特別支援教室に関して指導経験のない指導者でも、自立活動で示される指導内容の1つの区分に焦点化し、生成 AI を活用しながら、自己効力感に関する心理学理論を指導のプロセスに組み込んでいくという授業開発のモデルは、1つのモデルとして他の指導場面でも活用ができると考える。また、本研究では、「自己効力感」という点に着目し、自立活動の「2 心理的な安定」に焦点化していかに児童の意欲を高めていけるかという観点で授業モデルを開発した。同じように「2 心理的な安定」に困難さを抱える児童に対しても本授業モデル（授業のプロセス）を援用できるのではないかと考える。

第5 今後の課題

開発した授業モデルを実際の指導で行ったのは2学期からである。そのため、中長期的な児童の変容の見取りが必要だと考える。次年度の指導にも活かせるように学校内、指導者間で丁寧に引き継ぎをする必要がある。その上で、今後の課題として2点挙げる。

1点目は、特別支援教室での学びを学級での教科の学びや学習への意欲につなげるという点である。本研究において、自己効力感の高まりや意欲を育むということについて、児童の変容が見られた場面が増えた一方で、実際に学級でのようすを見ていても、一斉指導などの場面において、「教科の学習」（特に興味・関心が低いもの）に取り組むという点には課題が見られる。

2点目は、1点目と関連する部分があるが、「集合的効力 (collective efficacy)」の視点を小集団指導、学級指導に活かすという点である。「集合的効力」とは、他の人と一緒に行動することで、より多くのことを学ぶことができるという信念のことをいう⁴³。そういった信念は、対象とした児童のようすを観察していてもあまり見られていない。

また、原田信之(2023)⁴⁴が述べるように、「2つのエフィカシーは、アクティブラーニング(主体的、対話的・協働的で深い学び)のバックグラウンドで駆動する能力である」。この2つのエフィカシーとは、「自己効力 (self efficacy)」と「集合的効力」のことである。前者は主体的な学び、後者是对話的・協働的な学びのバックグラウンドにそれぞれ駆動するものである。令和3年の中央教育審議会の答申⁴⁵において、「個別最適な学び」や「協働的な学び」について提言されている。本研究では、自己効力感を取り上げ、特別支援教室の個別指導を研究の対象とした。アクティブラーニングの実現、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指す上で、「集合的効力」に着目し、小集団指導や学級等の指導についても研究をすすめていく必要があると考える⁴⁶。

【補助資料(1)】

(1) 本時の目標(第2次)

- ・動画を見て、長く飛ばすポイントを理解し、自らの課題解決に向けて、意欲的に取り組むことができる。

(2) 本時の展開

	学習活動・学習内容	・指導の留意点 【キーワード】	評価規準《評価方法》
授業前	飛行機に興味関心をもつ。	・興味のある本や模型などを用意しておく。【生理的・感情的状態】	
導入	あいさつをする。 単元計画について確認をする。 本時の学習内容とめあての確認をする。	・学習を通して、年度末にどうなっていたいか、どうしたいのかを確認する。 ・ホワイトボードに学習の流れを示し、見通しをもたせ、学習に対する、不安点がないようにする。【生理的・感情的状態】 ・前時の振り返りをもとに、自分のめあてを確認し、ワークシートに書かせる。記入例を提示する。書けたことに対して、即時フィードバックをする。	
展開	飛行機研究を進める。(モデルから学ぶ) (1) 動画を見る。 (2) 折り方や飛ばし方のポイントをワークシートに書く。 (3) 実際に、ポイントを活かして、紙飛行機を作成し、飛ばしてみる。	【代理体験】 ・動画を見る視点、ワークシートに書くことを事前に確認する。 ・短い時間で区切り(視覚聴覚情報の保持と書字への混乱を軽減)、話の内容をワークシートに書くかを選択させる。書けたことを褒める。【社会的説得】 ・「どうしたい?」という発問を児童に投げかけ、残りの学習時間で何をするのか選択させる。決められない場合は、指導者側から動画のポイントをもとに、紙飛行機を作成するように提案する。 ・終了時間を伝えておく。 ・基本的な約束を確認する。 ・選択肢をもとに、自分で取り組むことを決めさせる。	すすんで、課題に取り組むことができたか 《観察》

	(4) ポイントを活かしたのか振り返る。	・ワークシートに書いたポイントを活かしたことを褒める。【社会的説得】	
まとめ	振り返りを行う。 楽しかったこと、うまくいかなかったことなどをワークシートに振り返りながら、今後の学習の見通しを一緒に確認する。	・ワークシートに本時の感想と次時の計画を書けるように、一緒に内容を考える。自分で書くことができた部分を褒める。【制御体験(ワークシートに書く)】【社会的説得】	取り組んだ学習について、自分の言葉で感想を述べ、次時の見通しを立てることができたか《観察》

《参考文献一覧》

- ・A・バンデュラ、原野広太郎 監訳(1979)『社会的学習理論』金子書房
- ・アルバート・バンデュラ 本明寛、野口京子 監訳(1997)『激動社会における自己効力』金子書房
- ・A.Bandura(1977)Self-efficacy:Toward a unifying theory of behavior change.*Psychological Review*,84,191-215.
- ・Albert Bandura(1997) Self-Efficacy: The Exercise of Control *New York: Freeman*
- ・文部科学省 国立教育政策研究所(2015)『生徒指導リーフ』
- ・文部科学省(2018)特別支援学校教育指導要領・学習指導要領解説(自立活動編)
- ・文部科学省(2022)「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
- ・文部科学省(2022)「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告」
- ・文部科学省(2023)「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」
- ・中央教育審議会(2021)『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』
- ・東京都教育委員会(2021)令和3年度 公立学校統計調査報告書【学校調査編】第5表、
- ・東京都教育委員会(2023)令和5年度 公立学校統計調査報告書【学校調査編】第5表
- ・東京都教育委員会(2021)「特別支援教室の運営ガイドライン」
- ・八王子市教育委員会(2021)「八王子市版特別支援教室運営マニュアル」
- ・バリー・ジーマンほか(2009)『自己調整学習と動機づけ』北大路書房
- ・祐宗省三ほか編(2019)『新装版 社会的学習理論の新展開』金子書房
- ・梶田叡一(1980)『自己意識の心理学』東京大学出版会
- ・小塩真司ほか(2021)『非認知能力: 概念・測定と教育の可能性』北大路書房
- ・ジョン・ハッティほか著、原田信之ほか訳(2023)『自立的で相互依存的な学習者を育てる コレクティブ・エフィカシー』北大路書房
- ・鹿毛雅治(2022)『モチベーションの心理学』中公新書
- ・奈良理紗(2021)『視覚障害特別支援学校の早期教育相談に対する教師の自己効力感成長過程に関する研究』インプレス R&D
- ・小木曾誉ほか(2016)「特別支援教育体制とインクルーシブ教育システムに関する一考察」障害者

教育・福祉学研究 12

- ・吉利宗久(2014)「インクルーシブ教育に対する高等学校教員の自己効力感：特別支援教育コーディネーターを対象とした質問紙調査の分析」岡山大学教師教育開発センター紀要 4
- ・高橋史ほか(2014)「児童に対する社会的スキル訓練による転校生受け入れに関する自己効力感向上効果」ストレス科学研究 29
- ・本田真大ほか(2009)「不適応状態にある中学生に対する学級単位の集団社会的スキル訓練の効果・ターゲット・スキルの自己評定、教師評定、仲間評定を用いた検討」教育心理研究 57
- ・植村里香ほか(2009)「友達とのかかわりが苦手な子どもに対するソーシャルスキルトレーニングの試み」教育実践総合センター研究紀要 18 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- ・野崎善之ほか(2023)「特別支援学校における自己効力感を高める現場実習のあり方についての考察」大阪教育大学 研究紀要
- ・宮嶋友香理(2018)「漢字の習得に困難のある小学校3年生への漢字の指導の検討 プランニングを促進する指導の実践」筑波大学特別支援教育研究 12
- ・田村妙子(2009)「発達障害児の自己効力感を高める指導：掃除の指導をとおして」広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要 7
- ・坂野雄二ほか(1986)「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」行動療法研究 12(1)
- ・竹綱誠一郎ほか(1988)「自己効力に関する研究の動向と問題」教育心理学研究 36 pp.172-184
- ・亀井宗(2023)「自己肯定感が育つ場所」『心理学ワールド(100)』日本心理学会
- ・江本リナ(2000)「自己効力感の概念分析」日本看護科学会誌 Vol.20 No.2 pp.39-45
- ・Alfred Schutz(1970) on Phenomenology and Social Relations, *University of Chicago Press*, pp.243-262
- ・Dimopoulou,E.(2012)Self Efficacy and Collective Efficacy Beliefs of Teachers for Children with Autism,*Literacy Information and Computer Education Journal(LICEJ)*, Vol.3, Issue 1

《脚注》

- ¹ 文部科学省(2022)「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」特別な支援を必要とする児童生徒数の増加は、保護者や指導者の特別支援に関する理解が進んだことも関係している。
- ² 東京都教育委員会(2021)令和3年度 公立学校統計調査報告書【学校調査編】 第5表、令和5年度のものと比較した。
- ³ 令和4年3月の文部科学省による「特別支援教育を担う指導者の養成の在り方等に関する検討会議報告」において、通級による指導を利用する児童・生徒の増加に伴い、通級による指導を担当する指導者の専門性の向上が重要であると報告されている。第1の主題設定の理由である、特別な支援を必要とする児童数の増加の観点からも指導者の専門性の向上は必要なことであると考える。
- ⁴ 東京都教育委員会(2021)「特別支援教室の運営ガイドライン」p.29において、「目標達成による指導終了に向けて～原則の指導期間の考え方～」について記されている。そこでは、「振り返り

を行う節目の期間を設定し、ここでは『原則の指導期間』と定める。」と「原則の指導期間」という言葉で説明がされている。東京都教育委員会 参考資料 「特別支援教室の運営ガイドライン～指導期間の考え方について～」、八王子市教育委員会（2021）「八王子市版特別支援教室運営マニュアル」p.25

⁵ 同上、p.14。東京都では、指導・支援の段階を3段階のレベルで示している。特別支援教室での指導・支援をレベル3、校内外の人的資源等を活用する指導・支援をレベル2、在籍学級担任を中心とする指導・支援をレベル1としている。

⁶ 奈良理紗（2021）『視覚障害特別支援学校の早期教育相談に対する教師の自己効力感成長過程に関する研究』インプレス R&D

⁷ 小木曾誉ほか（2016）「特別支援教育体制とインクルーシブ教育システムに関する一考察」障害者教育・福祉学研究 12

⁸ 吉利宗久（2014）「インクルーシブ教育に対する高等学校教員の自己効力感：特別支援教育コーディネーターを対象とした質問紙調査の分析」岡山大学教師教育開発センター紀要 4

⁹ 高橋史ほか（2014）「児童に対する社会的スキル訓練による転校生受け入れに関する自己効力感向上効果」ストレス科学研究 29

¹⁰ 本田真大ほか（2009）「不適応状態にある中学生に対する学級単位の集団社会的スキル訓練の効果・ターゲット・スキルの自己評定、指導者評定、仲間評定を用いた検討」教育心理研究 57

¹¹ 植村里香ほか（2009）「友達とのかかわりが苦手な子どもに対するソーシャルスキルトレーニングの試み」教育実践総合センター研究紀要 18 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター

¹² 野崎善之ほか（2023）「特別支援学校における自己効力感を高める現場実習のあり方についての考察」大阪教育大学 研究紀要

¹³ 宮嶋友香理（2018）「漢字の習得に困難のある小学校3年生への漢字の指導の検討 プランニングを促進する指導の実践」筑波大学特別支援教育研究 12 pp.39-49

¹⁴ 田村妙子（2009）「発達障害児の自己効力感を高める指導：掃除の指導をとおして」広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要 7

¹⁵ 坂野雄二ほか（1986）「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」行動療法研究 12（1）pp.73-82 GSES（一般性セルフ・エフィカシー尺度）とは、個人の一般的なセルフ・エフィカシー認知の強さを測定するための質問紙のことをいう。

¹⁶ OpenAI 社の ChatGPT（GPT 3.5）の無料版を使用した。

¹⁷ アルバート・バンデューラ 本明寛、野口京子 監訳（1997）『激動社会における自己効力』金子書房 pp.2-3

¹⁸ 鹿毛雅治（2022）『モチベーションの心理学』中公新書 p.147

¹⁹ A.Bandura(1977)Self-efficacy:Toward a unifying theory of behavior change.*Psychological Review*,84,191 215. バンデューラは「効力予期」と「結果予期」について、図式を用いて説明している（下図参照）。バンデューラはこの2つの予期について、区別して説明し、前者を自己効力として重要視しているが、竹綱ら（1988）の自己効力に関する研究の動向を調査した研究によれば「効力予期」と「結果予期」は区別できないとする研究などもあり、区別できるかどうかについては若干の混乱が見られるとしている。竹綱誠一郎ほか（1988）「自己効力に関する研究の動向と問題」教育心理学研究 36 pp.172-184

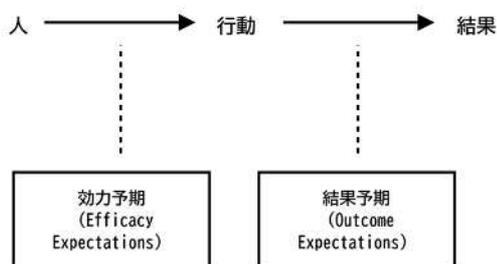


Fig.1 効力予期と結果予期の相違を表す図式(bandura 1977)

- ²⁰ A.バンデュラ(Albert Bandura)、原野広太郎 監訳(1979)『社会的学習理論』金子書房 pp.89-90、祐宗省三ほか編(2019)『新装版 社会的学習理論の新展開』金子書房 p.35
- ²¹ 福島脩美(2019)「4 自己効力(セルフ・エフィカシー)の理論」祐宗省三ほか編『新装版 社会的学習理論の新展開』金子書房 p.36
- ²² 亀井宗(2023)「自己肯定感が育つ場所」『心理学ワールド(100)』 日本心理学会 特別支援学校教育指導要領・学習指導要領解説(自立活動編)においても、「『自己を肯定的に捉える』感情は、自分にも良いところがあると認める感情であり、自己肯定感や自己有能感と言われることもある」と説明されている(p.112)。
- ²³ 梶田叡一(1980)『自己意識の心理学』東京大学出版会
- ²⁴ 文部科学省 国立教育政策研究所(2015)『生徒指導リーフ』
- ²⁵ 江本リナ(2000)「自己効力感の概念分析」日本看護科学会誌 Vol.20 No.2 pp.39-45 参照
- ²⁶ アルバート・バンデュラ(Albert Bandura) 本明寛、野口京子 監訳(1997)『激動社会における自己効力』金子書房 pp.3-6
- ²⁷ 文部科学省(2018)特別支援学校教育指導要領・学習指導要領解説(自立活動編)p.104
- ²⁸ A.Bandura(1977)Self-efficacy:Toward a unifying theory of behavior change.*Psychological Review*,84,191-215、A.バンデュラ(Albert Bandura)、原野広太郎 監訳(1979)『社会的学習理論』金子書房 pp.91-95
- ²⁹ 文部科学省(2018)特別支援学校教育指導要領・学習指導要領解説(自立活動編)p.111
- ³⁰ 野崎善之ほか(2023)「特別支援学校における自己効力感を高める現場実習のあり方についての考察」大阪教育大学 研究紀要
- ³¹ 文部科学省(2018)特別支援学校教育指導要領・学習指導要領解説(自立活動編)p.112
- ³² 同上 p.112、pp.118-119
- ³³ 鹿毛雅治(2022)『モチベーションの心理学』 中公新書 pp.277-279 フィードバックとは、結果に関する情報が伝達されることでその後の行為が調整される現象のことを言う。つまりフィードバック情報とは、フィードバックに含まれる意味内容のことである。フィードバック情報には、4つの種類がある。第一に、「遂行フィードバック」(遂行の的確さに関する情報を提供するもの)、第二に、「動機付けフィードバック」(当人の能力についての情報を提供するもの)、第三に、「帰属フィードバック」(行為者による遂行のプロセスや成果を一つあるいは複数の原因に帰属するもの)、第四に、「方略フィードバック」(方略がうまく活用できているか、あるいは方略使用の効用について当人に伝えるもの)である。本研究では、「こういう方法が良かった(良くなかった)

ね」というように、成功や失敗の原因が方略にあることを伝える「方略フィードバック」を振り返りの場面で用いるようにした。

³⁴ 同上 p.307 マスタリー目標に対して、能力の高さを誇示したり、他者をしのいだりする、量的な目標のことをパフォーマンス目標と言う。

³⁵ フランク・パハレス(2009)「第5章 自己調整学習における動機づけ要因としての自己効力信念の役割」バリー・ジーマーマンほか『自己調整学習と動機づけ』北大路書房 p.94 Alfred Schutz (1970) *On Phenomenology and Social Relations*, *University of Chicago Press*, pp.243-262 参照

³⁶ 小塩真司ほか(2021)『非認知能力：概念・測定と教育の可能性』北大路書房 pp.101-114 非認知能力の1つとされる「楽観性」(optimism)に注目した。「楽観性」とは、将来をポジティブにみて柔軟に対処する能力とされる。この「楽観性」を高める方法の一つにBPS(Best Possible Self)法がある。「将来どうなっていたいか」などといったことを繰り返し想像したり書き出したりする方法のことを言う。

³⁷ 文部科学省(2018)特別支援学校教育指導要領・学習指導要領解説(自立活動編) p.116

³⁸ 文部科学省(2023)「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」

³⁹ 文部科学省(2018)特別支援学校教育指導要領・学習指導要領解説(自立活動編) p.121

⁴⁰ 文部科学省(2023)「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」 p.2

⁴¹ 単元計画は生成AI(Chat GPT)を用いながら作成した。

⁴² この点については、週に2時間の特別支援教室での指導なので、普段から対象児童に関わる在籍学級担任をはじめとする方々の指導や支援による部分も大きい。

⁴³ ジョン・ハッティほか著、原田信之ほか訳(2023)『自立的で相互依存的な学習者を育てるコレクティブ・エフィカシー』北大路書房 「集合的効力」(collective efficacy)とは、もともとはバンデューラが述べている概念である。Albert Bandura(1997) *Self-Efficacy: The Exercise of Control* *New York: Freeman* 参照。

⁴⁴ 同上 pp.238 239

⁴⁵ 中央教育審議会(2021)『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』

⁴⁶ 「集合的効力」(コレクティブ・エフィカシー)は、自己効力(感)と密接に関係しており、個々の自己効力の単なる総和ではないとする。それゆえ、深い学びを考えていく上で、自己効力と集合的効力についても一体的に考えていくことが重要であると考えられる。Dimopoulou,E.(2012) *Self Efficacy and Collective Efficacy Beliefs of Teachers for Children with Autism*, *Literacy Information and Computer Education Journal(LICEJ)*, Vol.3, Issue 1 参照。

【研究成果発表会でいただいた質問とその回答】

○紙飛行機を作成する学習についてご紹介いただきましたが、対象児童の人数や時数、教科等について詳細を教えてくださいましたらと思います。

対象児童は1人のみの個別指導です。自立活動として週に1時間の個別指導をしています。単元全体の指導時数は明確には決めず、児童のようすを見ながらすすめました。詳細は報告書を見ていただければと思います。

○また、その他の学習で同様の学習づくりをされていたら、紹介いただけたらと思います。今回は対象児童1名について、授業モデルを考えました。